



## 高橋 宏明

社団法人東北経済連合会 会長

### 世界が憧れる東北をめざして

その昔、マルコ・ポーロが目指した黄金の国ジパング。その最終目的地は平泉だったかもしれない。東方見聞録には「宮殿の屋根はすべて黄金でふかれ、その価値はとても評価できない」とあり、まさに、中尊寺金色堂を言いあらわしている。また、金色堂の内部には夜光貝を使った螺鈿やアフリカゾウの象牙など、海外からもたらされた装飾品も多い。東北をたばねた奥州藤原氏の繁栄がしのばれる。

奥州藤原氏は青森県の西側、日本海に面した十三湊<sup>とさみなと</sup>を拠点に交易を行い隆盛を築いた。海路は北海道、京都、博多に大きく開かれており、金や馬、鉄製品などが奥州から運ばれ、仏像、仏画、教典や織物などが交易地から調達された。さらに、藤原氏の政庁・柳之御所跡<sup>やなぎのこしよ</sup>からは上質な中国産の陶磁器が大量に出土しており、中国・宋との交易も盛んに行われていたと考えられている。

今も昔も、地域の産品に磨きをかけ、日本全国、そして世界に通用するグローバルな商品として販路を拡大していくことが、地域発展の処方箋となる。東経連では昨年6月、中国江蘇省の無錫市にある江蘇国際技術転移センター内に、東経連ビジネスセンターの中国事務所と東北の企業の製品を取り扱う常設展示コーナーを設置した。知名度はさほど高くないものの、高い技術力を誇る中小企業が東北には数多い。なかには売上を大きく伸ばす会社もあるなど、なかなか活発な様子である。成長著しい中国の活力を取り込み、東北発展の原動力にしたい。

また、奥州藤原氏の時代、十三湊は国際貿易港として繁栄するとともに、ここから白河の関までを貫く奥大道<sup>おくだいどう</sup>が貫き、各地の文物と文化が往来していたという。現代においても、海外の活力を取り込むためには、世界への物流拠点となる港の整備が不可欠である。そして、各地をネットワークでつなぐ日本海沿岸自動車道、三陸自動車道などの高速交通網を整備することにより、世界の活力を東北全域に行きわたらせ、東北の一体的な発展を図りたい。

昨年、東日本大震災により東北は甚大な被害をこうむった。津波に家をさらわれるなどして、新年を避難先で迎えられた方々も大勢いらっしゃると思われる。しかし、この苦難を乗り越え、東北は力強く立ち直りたい。かつて東北の地に花開いた平泉は、およそ900年の時を経て世界遺産に登録された。今回の大震災を受けた東北の人々の行動をみると、清衡の時代に「万人が平等で互いに励まし合って生きた」<sup>(\*)</sup>、その心が今も変わらず東北に暮らす人々の胸の中に残されていると、識者は言う。「世界が憧れる東北に」、そんな理想を抱きながら、今年も懸命に歩みを進めていこうと思う。

(\*)平成23年7月10日付 日本経済新聞 36面「蘇ったところ」(高橋克彦氏著)

(東北電力株式会社 取締役会長・たかはし ひろあき)